

## 洛西地域映画史聴き取り調査報告 4

### エトナ映画の軌跡

富田 美香 (立命館大学文学部助教授)  
E-MAIL mtt20017@lt.ritsumeai.ac.jp

本稿は、マキノ映画を源流とする京都の映画文化のなかでも、きわめて特殊な存在でありながらその活動様態を明らかにすることができなかったエトナ映画社についての調査報告である。

本調査は、京都映像文化デジタル・アーカイヴ——マキノ・プロジェクト——のウェブサイトを通じて2004年1月に受信した一本のメールに端を発している。「エトナ映画社について」と題されたそのメールは、エトナ映画社を故・田中伊助とともに主宰していた田中聖峰（本名・田中英一）氏のご子息・田中英雄氏からであり、エトナ映画社資料の現存情報と調査協力を連絡してくださったものである。

トーキー移行期の1934年に忽然と京都映画界に現れたエトナ映画社は、映画業界外部の資産家である田中伊助個人によって設立され、マキノ映画解散後の御室撮影所を最後に使用した映画会社である。このエトナ映画社は、マキノ映画出身のスタッフも多く、島津製作所の技術者が開発した専用のトーキーシステムの導入をはじめ、浪曲映画や外国連続活劇の翻案物といったユニークな娯楽作品群を発表するなど、人員構成や制作体制も含め、京都の特殊性が強くあらわれた映画会社であった。しかしながらエトナ映画社についての映画史的評価はきわめて低く<sup>①</sup>、その理由は、活動期間がわずか一年間と短く、製作した9本すべてが娯楽作品主体であったがために、同時代において評価の対象外とされてしまったことに加え、それらの作品が既に散逸し、会社やスタッフ、作品についての情報も少なく、活動様態をあきらかにすることがかなわなかったことにある。

したがって本報告では、本年度の調査であきらかになったエトナ映画社の成立経緯と活動内容を

基礎調査としてまとめ、京都の映画文化の特殊性と密接に関連していたエトナ映画社の再評価にむけた一歩としたい。

#### 1. 田中聖峰氏紹介

田中聖峰氏（本名：田中英一、1916年生まれ）は、カメラマンとしての別名を岸雅夫といい、田中伊助氏（後述参照）の次弟にあたる。エトナ映画社にかかわる以前から、田中氏はコダックの16mmカメラを購入して撮影するほどの映画愛好者であり、実兄の田中伊助がエトナ映画社を設立したことから、18歳にして撮影所長に着任し、同時にカメラ助手の岸雅夫として撮影現場に参加するようになった。それまで独学でカメラを操作していた田中氏は、このエトナ映画時代に、マキノ映画出身の田中十三カメラマンから助手として撮影術を学び、1934年に『霧隠忍術旅』でプロのカメラマンとして一本立ちを果たした。田中氏の言によれば、岸雅夫（ギシマサオ）は技師マサオ、田中聖峰の聖峰は田中氏が愛好したパラマウント（映画）の意を込めたそうであり、趣味が実益に転じた18歳の微笑ましい意気込みと軽やかな感性



エトナ映画社所長室の田中聖峰氏

とが感じられる。田中氏はエトナ映画社解散後も映画界から去ることなく、むしろその16mmカメラを活用し、文化映画やパラマウント・ニュース映画を撮影するカメラマン・岸雅夫として活躍するとともに、田中聖峰の名で田中十三とともに中川紫郎<sup>(2)</sup>の合同映画社の幹部に名を連ねるなど、文化映画の領域で活動を展開した。その後、戦時の応召を経て、戦後は16mmカメラを売却し、京都の映画会社に入出入りする印刷業を営んだ。つまり田中氏の映画人としてのキャリアは16mmカメラとともにあり、その点ではカメラマンとしての岸雅夫の方が長かったといえるが、田中氏自身は田中聖峰の名前を愛用し、家族を被写体にしたプライベート・フィルムにも監督名として田中聖峰の名を明記している。

この16mmカメラへのこだわりはエトナ映画社自体にもみられ、35mmカメラを6台（エクレー1台、パルボ4台、アイモ1台）<sup>(4)</sup>と十分に所有していたにもかかわらず、「イーストマン・シネ・コダック・スペシャル」を所有機材として特記し、さらには田中聖峰所長を中心に16mm部門の製作体制の新設を模索する<sup>(5)</sup>など、小型映画への志向をみせている。この16mm部門の第一作として試作された『白い鼠』<sup>(6)</sup>の現存を今回の調査で確認できたが、16mmフィルムはビネガー・シンドロームとカビに犯され、硬化が進行した状態であった。そのため『白い鼠』のフィルムは、株式会社IMAGICAウエストの協力のもとに、フィルムを軟化させカビを除去する作業を経て、デジタル

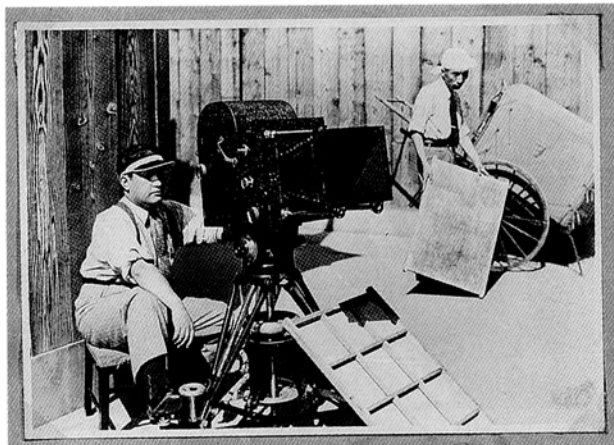
データへの変換を終えたところである。

今回の調査で確認できた岸雅夫氏の撮影作品リストは、別表を参照されたい。また、この『白い鼠』を含めたエトナ映画作品の映像分析と田中氏の文化映画時代については、稿を改めることとする。

## 2. エトナ映画社設立経緯

エトナ映画社を主宰した田中伊助（1911年生まれ～1972年没）は、地主・材木商を営み、18歳で長男として家督を継ぎ、本名の良雄を祖父の伊助の名に改めた<sup>(8)</sup>。当時の田中家は京都で有数の資産家であり、その規模を田中伊助の所得税にみると、<sup>(9)</sup>明治43年は1653円、大正14年は36531円、エトナ映画社の設立・解散を経た後の昭和11年では16488円と、当時商工会議所会頭であった田中博の所得税額15730円よりも高額である。また、田中氏所蔵の大阪朝日新聞切り抜き記事によると、<sup>(10)</sup>田中伊助は5000戸の借家を有し、京都中央市場倉庫会社重役を務め、京都府多額納税者一位として社会貢献も果たし、紺授褒章、緑授褒章を受章している。多芸でもあり、三代目吉田奈良丸の弟子として檣丸を号し、能楽では観世流家元から能楽皆伝を許され、田中黙山の号を有していたとあり、<sup>(11)</sup>当時23歳の若き田中伊助にとってエトナ映画社は、吉田檣丸の名前で浪曲トーキー『神崎東下り』の吹き込みや、田中黙山の名で『霧隠忍術旅』の原作に関わるなど、趣味を公式に発揮できる場であったと思われる。この田中伊助の経済的安定は、材木商よりも地主としての収入によるところが大きかった為、戦後の財産税課税により破産へとい<sup>(12)</sup>たり没落を余儀なくされた。それゆえにエトナ映画社時代は、田中伊助、田中聖峰兄弟にとって、順風満帆の最も輝かしい時代であったといえよう。

田中伊助がこのエトナ映画社を設立した理由はこれまで不明であったが、実弟の田中聖峰氏の談話によると、伊助自身の浪曲映画の製作が最大の動機であったようである。実際に田中伊助は、エトナ映画社第一作目の『神崎東下り』で自らの口



愛用のカメラと22歳の「岸雅夫」。レフは森江章浩。<sup>(7)</sup>

演を吹き込んだのみならず、三作目として、三代目吉田奈良丸と「南部坂」や「月形半平太」の浪曲トーキーの製作にむけた出演交渉<sup>(13)</sup>をしており、浪曲映画の製作に強い意欲を持っていた事がわかる。浪曲の音と口演映像を挿入する浪曲映画は、トーキー移行期に形成され、鈴木米若が吹き込んだ『佐渡情話』（日活、1934年）のころから人気を博し、天中軒雲月が『新曲五郎正宗』（日活＝太秦発声、1936年）で、広沢虎造が『忠治とお万』（日活太秦、1936年）でこのジャンルに登場して人気を決定づけた。エトナ映画の浪曲映画は、『佐渡情話』に続く初期の試みであったと同時に、きわめて純粹に私的な動機に裏打ちされていた特殊な存在であったといえる。

もう一つの設立理由として田中氏の談話で浮き彫りにされた活動弁士の野村雅廷の存在も、1934年というトーキー移行期の時代状況と京都というムラ社会的な地域の特性が反映された、エトナ映画社の特殊な点である。田中氏の視点を借りると、映画に関心を示した若き富豪の田中伊助のもとに、活躍の場や資金源を探していた京洛の映画人が集まってきた構図が見えてくるのである。

野村雅廷は、日活直営の新京極の帝国館で大正時代から昭和にかけて人気を博した主任弁士であり、その帝国館プログラムの執筆・編集から、『修羅八荒』の脚色、帝国館での『新版 大岡政談』（1928年、伊藤大輔）総集編（20巻）の“新編集”を手がけて自ら解説を担当するなど、スター弁士として多彩な活動をみせた人物である。この日活の弁士である野村雅廷がエトナ映画社を設立から総務兼脚本家として牽引した経緯も、今まで謎であったが、人気弁士がトーキー移行期に転職を試み、自らが活躍できる映画会社の出資者として浪曲好きの若い田中伊助を動かしたと思われる。そのエトナ映画社に集まったスタッフも、1928年にマキノ映画から独立して双ヶ丘撮影所を開いた田中十三や河合広始を筆頭に、宝塚キネマや東亜キネマ解散後にフリーとなったスタッフやスターであり、花形スターやスタッフの不在がエトナ映画社の大きな弱点となった。

この田中伊助に着目したのは、エトナ映画のスタッフのみにとどまらず、当時、第一映画社を設立した永田雅一も同様である。永田は、エトナ映画社を設立したばかりの田中伊助に対して第一映画社への支援を依頼し、「軍資金については田中氏から積極的に應援を得ることによって鬼に金棒ですよ<sup>(14)</sup>」と発言するなど、田中伊助を完全にパトロン視している姿勢があきらかだ。このような映画業界との関係も、田中家が一年足らずで映画界から撤退する原因になったといえよう。

### 3. エトナ映画社の活動

エトナ映画社の活動は、1934年7月から1935年5月末の解散までの10ヶ月間にすぎない。今回調査して判明したエトナ映画社の活動史<sup>(15)</sup>を以下に略記するが、その歩みからは、確固とした製作・経営方針もないままに前触れ無く設立された同族経営の映画会社が、製作・配給体制を整備しおえたと同時に、親族一同の反対にあい、突如として解散に陥った様子をみてとることができる。

#### ○1934年7月 エトナ映画社設立

島津製作所の戸越時吉技師発明による低周波トーキー録音機をもって設立され、第一回作として吉田植丸吹き込みの浪曲映画『赤穂義士伝 神崎与五郎』の撮影を、千恵プロ<sup>(16)</sup>のトーキーステージを借りて開始する。

○1934年8月 『赤穂義士伝 神崎東下り』、『暁の非常線』公開。

#### ○1934年9月 営業事務所移転

連続映画オールトーキー『鉄の爪』を全4篇の作品として撮影に着手。業務拡張のため新営業事務所を中区御幸町通六角（田中家）へ新設した。

#### ○1934年11月 新社長と製作体制の整備

田中伊助を新社長に迎え、スタジオ建設、スターの専属制等につき準備を進める。

#### ○1934年12月 自社スタジオ決定

御室の元マキノ・スタジオ（敷地3500坪）の売買契約が高津梅次郎氏との間で成立し、21日京都区裁判所で所有権移転登記を了した。ステージは



風害で倒壊したままのため建設することになるが、事務所は使用に耐える。撮影所長は田中聖峰、製作部長は野村総務が兼任。

『鬼伏せ頭巾』（後藤岱山監督）を製作中。浅香麗三郎、水原洋一が正式入社。「南部坂」のトーキー映画化で、吉田奈良丸の支配人と打ち合わせ。

○1935年1月 積極的展開へ

都村健が宣伝部部長に就任。日本低周波トーキーの解散から、千恵プロの塚越式トーキーのもとで働いていた中川佐一郎が新規に開発した、中川式トーキーへ変更。中川は中川堯史と改名し、エトナ撮影所内に「オーディオシネマ研究所」を設立。旧マキノ撮影所を買収して本格的に現代劇、時代劇を月四本製作することに決定。羅門光三郎が入社。

『鬼伏せ頭巾』、『霧隠忍術旅』、『鉄の爪』第一編公開。

○1935年2月 ステージ建築に着手。

200坪の敷地に15間10間の長方形型高さ24尺の鉄筋本建築ステージを着工。

『鉄の爪』第二編公開。

○1935年3月 株式化の模索

個人経営の形態から、田中家の30万円の出資を中心に株式会社化する旨報道される。新人女優を全国から公募。

○1935年4月 ダークステージ建設

ダークステージの地鎮祭を行う。

○1935年5月 解散

創業1年、8本を製作したが20万円の欠損を招き、田中家の反対となり、5月末日をもって解散。野村雅延総務が事業継続の意図のもとに有力筋と折衝をおこなったが不調におわり、弁護士の清算に入る。48名の従業員には2か月分前後の解散手当てを支給する旨報道される。

○1935年7月 エトナ映画の整理へ

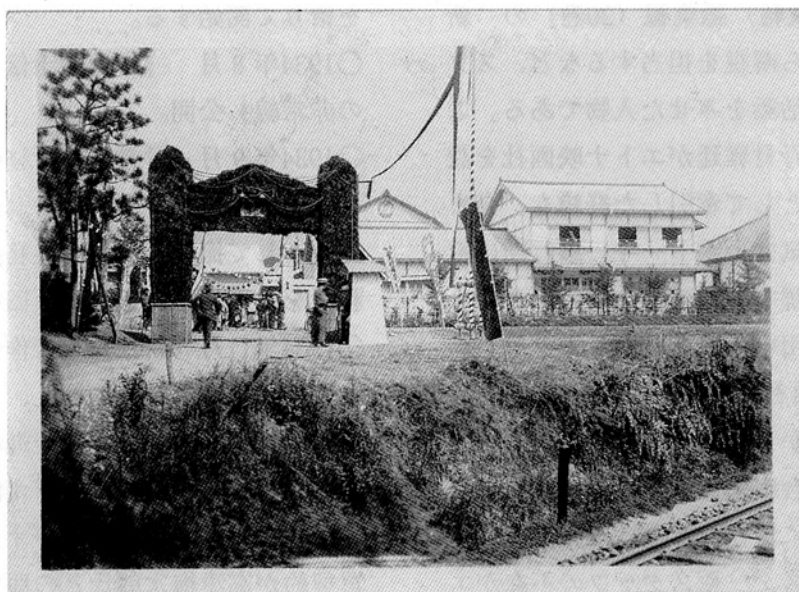
田中伊助の業を継いで田中聖峰がエトナ映画社社長に就任し、エトナ映画社作品の配給と、エトナ映画社の録音システム（中川式）による録音、16mm製作請負を業務として行う方針。7月1日より河原町三条下る大黒町へ事務所を移転。

○1935年8月 『義人長七郎 江戸の巻』、『黄金菩薩剣』公開。

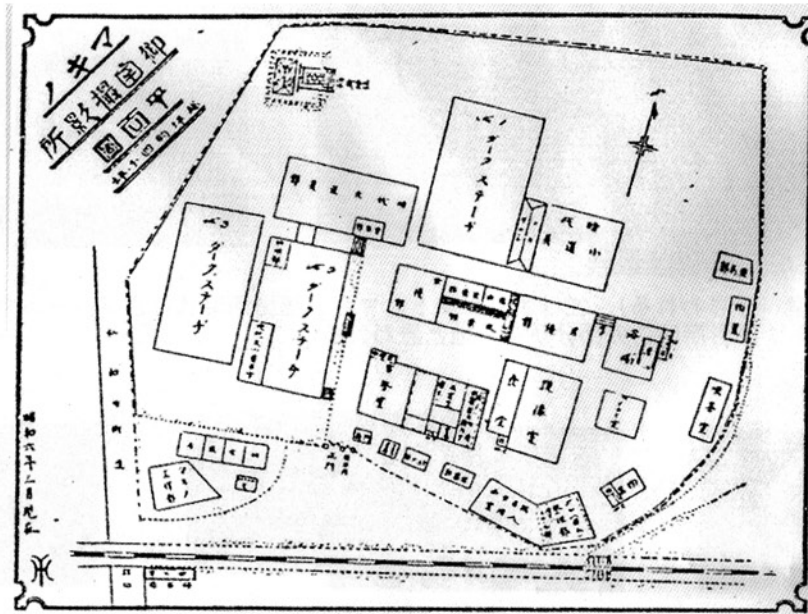
#### 4. エトナ映画社撮影所

田中氏所蔵フィルムに収められたエトナ映画撮影所の映像をもとに、エトナ映画撮影所を紙上再構成する。映像は雪が残っている事から、前述の1935年2月のステージ建設終了時に撮影したと思われる。

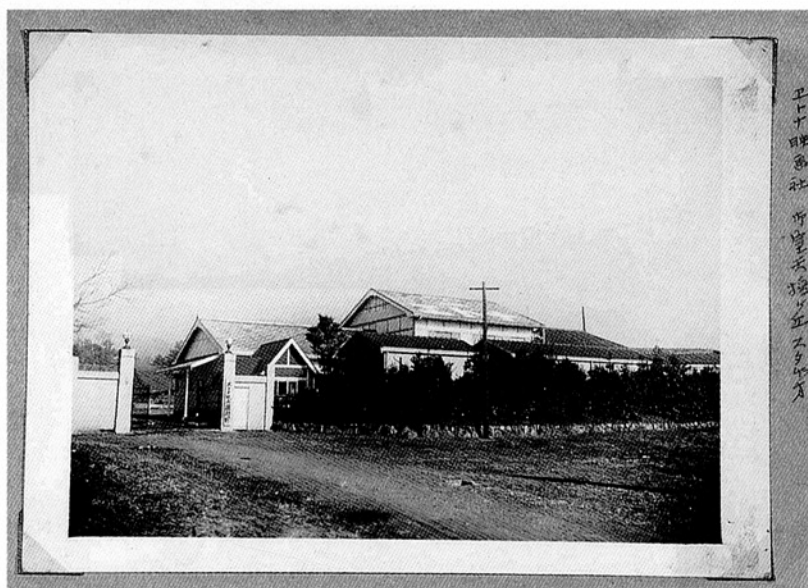
最後に、エトナ映画社の大きな特徴として、トーキーシステムについてふれておきたい。



1928年のマキノ御室撮影所



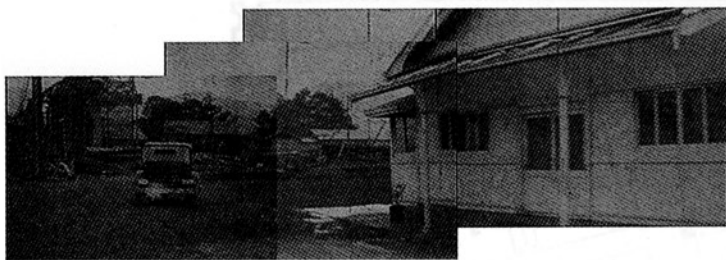
マキノ御室撮影所1931年



エトナ映画撮影所。マキノ御室撮影所と門柱、守衛室などは同様だが、ステージ位置が異なっている。



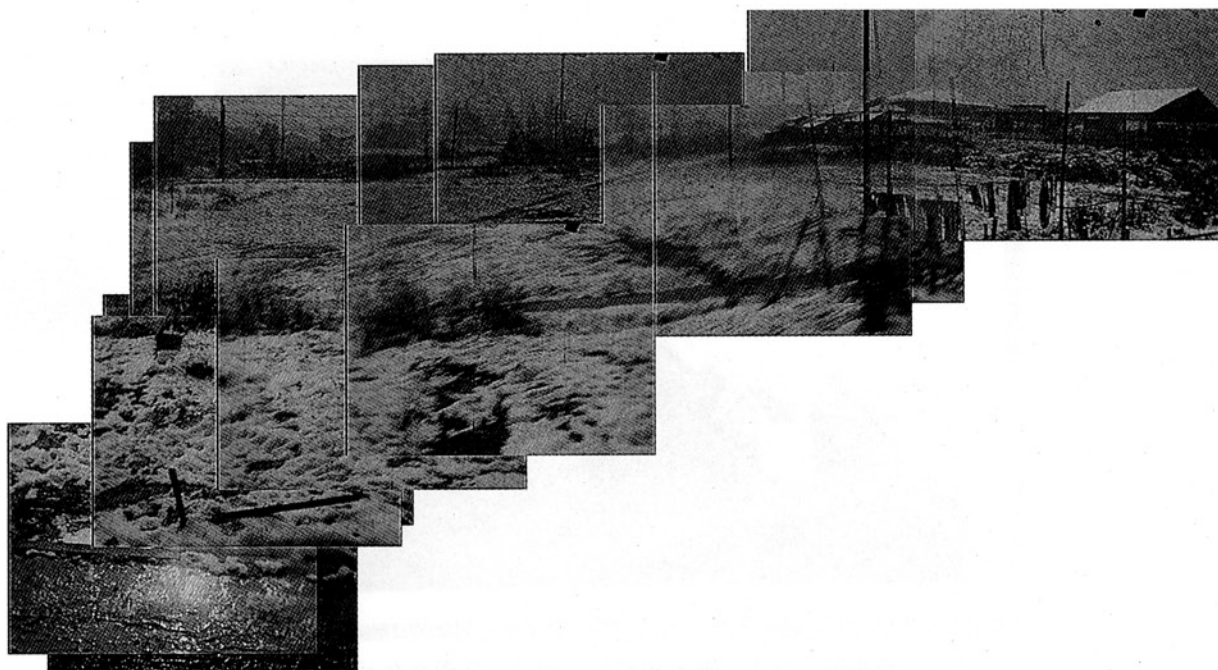
エトナ映画撮影所 稲荷前 マキノ撮影所と同様の位置に稲荷が建っている。



右から守衛室、事務室（と思われる）、左は Horizont。マキノ撮影所時代は左フレーム外にダークステージが並んでいたが、エトナ撮影所はこの部分が空き地と思われる。



撮影所入り口から門を通過した撮影所内部へ。妙心寺駅看板が見える



画面奥に京福鉄道が走っており、竜安寺西ノ川町11近辺からの眺めと思われる。

エトナ映画社が設立時に自社のトーキーシステムとして採用した、低周波録音システムと称される戸越式トーキーは、島津製作所技師の戸越時吉（生没年不明）によって開発されたが、この戸越式トーキーと戸越時吉に関する情報はこれまで皆無であった。今回の調査で判明した事は、戸越が島津製作所に在籍した期間はエトナ映画社設立前までであり、島津製作所とエトナ映画社との提携関係はなかったことである。島津創業記念資料館

の川勝美早子氏の調査によると、戸越時吉は1929年1月1日付で島津製作所に入社し、準社員として技術部に配属され、1931年7月1日付で社員となったが、在籍は1933年7月までである。エトナ映画社の設立は1934年であり、それまで1年間のブランクがあり、おそらくこの期間に個人としてトーキーシステムに関わっていた可能性がある。いずれにしろ、1935年2月に戸越の日本低周波トーキー部は原因を公表しないまま解散をし、エト



ナのトーキーシステムは戸越式から中川堯史の開発した中川式へとかわった<sup>(17)</sup>。戸越の名前はエトナ映画作品から消えたが、その後の消息として、1938年公開の『シャム大野象狩』(合同商事映画部)の現地録音を担当した記録があり、映画録音業は継続していたと思われる。

戸越式から中川式への変更は、エトナ映画社が設立当初から撮影時に千恵プロのステージを借用していた人的交流に加え、戸越式が田中氏の談話によると千恵プロで試用していた塚越式と同様のデンシティタイプであったことから、選択されたと思われる。

今回の調査はエトナ映画社の第一次調査として基礎データの整理をおこなったが、今後は作品内容とともに、エトナ映画社から文化映画への人脈・機材を含めた流れを調査していく予定である。

## 【洛西地域映画史聴き取り調査報告

### 田中聖峰氏談話】

#### 【エトナ映画社の名前】

——まず、お兄さんの田中伊助さんがエトナ映画社を始めた経緯を教えてください。

京都では(田中家は)有名な金持ちやったんです。それやけど親が死にましてね、それでもうこの際だからとばかりに金を使いだしたんです。(田中伊助は)浪花節が好きなもんですから、吉田奈良丸先生についてやったわけね。ワシは京都で吉田樞丸やと(笑)。私は映画が好きなもんだから撮影所長をやって、『神崎東下り』が一番最初ですわ。そのとき私は、撮影が好きなもんですからギシマサオ(岸雅夫)という名前をつけて、撮影についてました。

——キシマサオではなくて、ギシマサオと読まなくてはいけないんですね(笑)。

——そういうことです。私はスーパー16mmを、今で言う何百万になるんですけど、その時分1600円ぐらいで、母親に無理に言うて(買ってもらって)。何もわけが分からずに自分で好きなもんを

撮影しとったわけですよ。フリー言うんですかね。——撮影所にいらしたとき、ギシ(岸)さんの名前と、もう一つ「田中聖峰」という名前を使っていらっしやいましたか？

「聖峰」は、若い時分ですけど、一応名前でした。「聖峰」っていう名前はね、パラマウントですよ。

——聖峰=パラマウント(笑)。それは田中さんご自身が付けたお名前ですか？

——そうそう。パラマウントって、あれ今大したもんですけど、その時分はね、アメリカで大したことなかったのが、日本に来てパッと上映されたから、「ああ、ええ名前や」言うて(笑)。初めはね、パラマウントの真似をしたんですね、あの(山の)絵が。

——エトナ映画社のあの山の絵はどなたが作ったんですか？

覚えてないなあ。私は映画が好きなもんですから、昔からヘンリー小谷の長いこと撮影助手をしとった山中いう奴が、関西支社をつくりたいというんで。その時分、ニュースがでてきた初めですからね、パラマウントもやりだしたら、関西には誰もおらんから「頼むわ」っちゅうて。それが始まりなんですわね。関西支社というものができて、私は名刺だけのことなんですけど、有名なパラマウントの山の入ったね、向うが作ってくれたんですよ、知らないあいだに。ちょうどエトナに出入りするようになったときに、「パラマウントの名前使うたるか」と、その名前をとってやったもんやから、アメリカの弁護士が怒りよってね、訴訟起こしてきよった。「変えて、撮影せいや」って。それでまあ名前変えて、(火山の)エトナ映画という名前になったわけですよ。それが一番最初や。

その時分ね、ヘンリー小谷っちゅうときはね、アメリカ映画一本撮れるっていうような、もうそれは有名な人ですよ。皆が「ヘンリー、ヘンリー」いうてね。

——ヘンリー小谷さんとは、どこでお知り合いになったんですか？パラマウント・ニュースの頃で

すか？

そうそう。山中の関係で、私はヘンリーを知るようになったわけですね。トーキーのなり始めの頃<sup>(20)</sup>で、私は映画が好きなもんですから、弟子の関係ですな。森江章浩っていうのがね、まあ今でいうたら私の助手でした。秘書ですわな。ウチへちょいちょい出入りしとったから、撮影の助手を私がやりだしたよって、私に従いとったわけ。森江がね、脚本書いたりしておった関係で、あっちこっち撮影するのに、フィルムがこの頃、無いんですわ。だからそれでいつも、ヘンリーさんが、パラマウントの、減多に貰える筈もないんだけど、私に送ってくれたわけです。この時分は皆、カメラがあんまり無いんで、私は持ってるからそれで担がれて、よう出かけてったわね。

——文化映画を撮っていたらしたんですね。パラマウント・ニュースのニュース映画を撮られたんですか？

そうそう、そうです。その時分はみんな楽しんでやってたよ。

#### 【エトナ映画社設立経緯：トーキー】

あの時分、日本でもトーキーがでてくるときで、京都はJ・Oトーキーとかね。京都の一流館の活弁やとった野村雅廷がやね、自分の命が危ないというんで…。

——日活系の映画館の人気弁士さんですよ。

ああ、そうそう、大弁士さんでしたよ。映画館の主任弁士。京都では有名だったんです。京極で一番、ようならしてた（笑）。それであっちこっちで映画をやってるうちに、自分が脚本屋をやりだしおって。その関係で、早う活動屋（弁士）も足を洗わんならん、あかんなあ、自分の首がボチボチ危ないっていうんで、むこうが就職先を探しておったわけ。そんで、うちの兄貴の尻を利用してやろうというところすわな。まあそれで、一生懸命やりおったのが始まりです。それが目的、まあそんなことですよ。

——野村雅廷さんと田中伊助さんは面識があったんですか？

昔から兄貴はやね、映画が好きやから活動屋と付合いが多かった。それで雅廷が「あ、コイツ一発引っ張って」で、それが浪曲で（笑）。本当はそれなんですな。雅廷に担ぎ出された。また私にそれが移って活動屋が本職になった、ということだけのことなんです。

——野村雅廷さんや他の映画人も、田中伊助さんのお宅に遊びにいったんですか？

ああ、そうです。友好関係にあったんやな、早く言えば。兄貴は自分の金を利用して何とかしてやろかと思う。雅廷は自分が何とかして、這い出してやろうというんで、京都帝国館をもう辞めたんですわね。確かに雅廷はね、ええ弁士やったですよ。口跡も何もかも良かった。どっちみち活動屋というのは、名前を売ることが一番肝心やから、まあ雅廷が一生懸命になりよって、それでエトナ映画の第一回目に活劇で、兄貴に勧めて、『神崎東下り』っていうんで一遍撮らしてみようやないかと。

——エトナ映画社の本社は田中さんのお宅ですか？

ああ、そうでしょう。自分とこのお家の借家をきれいに直して、それで本社という名前にしよったわけですね。あの時分ね、それはもう、（撮影所は）ガタガタやったんです。よその撮影所、退いてしまったあとですわな。だから兄貴がバツと派手にして。塗りなおして、エトナって名前を入れよった。ロケ用バスってヤツも作って、目立つように銀色やったと思うんやけど。家のなかの古いバス、引っ張ってきて、それを直して銀色にして、使ったわけやね。

——銀色ですか（笑）。ロケバスの運転手さんも、エトナ映画社の専属ですか？

ああ、吉川彦太郎、ウチ（田中家）のお抱え運転手やったね。あとになると分かったんだけど、これまた映画が好きで「映画のほうで使うてくれ」いうて、出てきよったんがはじめや。ロケバス運転したり、本社の自動車運転したりしとった。言うたら、運転手の部長やな。その時分、私も1台持ってたね、確かスチュードベイカー<sup>(21)</sup>かな。この



時代こんなもんあらへん。ウチの兄貴は名前売るの好きなだけに、これ確か、1番か100番。何かそういうようなのを、つけた覚えはありますか。当時は(自家用車を)4〜5台は持ってたでしょうね。

#### 【戸越式録音機】

——エトナ映画社のトーキーの録音機は島津製作所の技師さんが作ったんですよね。

そう。それが早くいえば、自分で作りおって。それがつまりあれ…。

——低周波録音システム？

うん、低周波。

——その島津製作所の技師は、戸越時吉さんという方ですか？

ああ、そう。戸越。

——この戸越さんが、独りで作った録音機をエトナ映画社に提供したんですか？それともエトナ映画社が買ったんですか？

ああ、そうして、売出してくれといわれて。

——エトナ映画社がトーキーの開発を依頼したのではなくて、島津製作所の戸越技師が、独りで録音機を作ったんですか？

そう。まあ、そういうことですわ、早くいえば。まあね、私らの口調でいうと、録音屋はこれなんです〔両手をボリューム調整する手つきでグルグル動かす〕。

——戸越さんが自分で操作したんですか？

そうそう。

——すると、島津製作所は辞められて、エトナに入ったんですか？

いや、入らずに、結局、歩合で、アルバイトで。録音技師っていうのは、私らがやるわけにいかんわね。これまたたいへんや。

——戸越式録音システムは、面積型と濃淡型のどちらですか？

縞が入っている、ぱーっと…、ウエスタンや。確かそのはずですわ。

——エトナと島津製作所とは交流があったんですか？

いや、別に無かった。大してね。あっちこっち

にトーキー会社ができましたからね。発声時代にはもう、てんやわんやや、皆がね。今でいうたら、どんなにしたら生き残りができるかな、と。

#### 【神崎東下り】

——エトナ映画第一回作品は浪曲映画『神崎東下り』ですが、その頃エトナの撮影所は台風で崩れていたそうですが。

崩れてたわ。もう、潰れかかったヤツをね、ここをどうも高津（小道具）がやとったわけですわ。

——初めての製作で、初めて使用する戸越式録音機で、色々トラブルがあったと思うんですが。

だろうと思いますね。昔はやっぱりね、色々ありますわな、トラブルもね。映画、映してみても、口が合わない。シンクロ、同時録音があの時分はなかなか難しくて、「えい、やあ、えい、やあ、たん、たん」いうてね、掛け声いわんと、三味線が合わんから。

——同時録音で、浪曲で語っているときに演技をしていたんですか？撮影の現場で。

いや、してない、演技は。うんうん。

——浪曲をレコードか何かで流して、それに合わせて演技をしているところを撮影したんですか？

そうそうそうそう。

——この「東下り」は田中聖峰さんが「総指揮」者ですね。

それは私のことですけどね、そういうことをせんことには、役目やとかいうのは、難しいわな。私が歳が若いもんやから、皆が馬鹿にしよるから。

——この映画では、後藤岱山さんが監督をされていました。

そうそう、あれはなかなか有名な奴や。まあ、岱山が遊んでるさかいに、っていうんで、むこうももう、ウロウロしとった時やからね。

——岱山を引っ張ってきたのは、誰ですか？

雅廷やろな、うん。後藤岱山ももう首が危ないでしょ？雅廷が脚本書いて、すぐにジャーと撮して歩きよったんやね、早撮りで。

——千恵プロの撮影所はずいぶん借りたんです

か？

千恵プロでいつも、全部したなあ。

——そのときには、大道具さんとかは、千恵プロのスタッフが手伝うんですか？

全部そう。全部、千恵プロの厄介になってたんですな。千恵プロはちっさいけれども、割と有名なからね。なかでちょっと撮っただけや。ステージマンやね。

——撮影は主にセットで撮られたんですか、それともロケに行かれたんですか？

雅廷も私も一緒に、撮影旅行ですわな。ロケハンで行きましたわね、富士山をポーンと撮ったりね。雅廷と何か大勢のもんが行きましたで。田中十三さんも来ました。兄貴がまたその時分、面白いもんやから、やっぱり付いて歩いて。現地を見んとね。ロケハンが撮影の始まりですね。あと、竜安寺のお寺の池のところでね、ロケ地みたいなモン、箱根の模造品やな。

——社長も一緒にですか（笑）。そうすると、会計の人も来ますよね。

日活の主任指揮者が楽師か何かそんなんで、これももう自分の首が危ないでしょ。だから、野村雅廷といっつも一緒にしとったわけですわ。音楽はやっぱり大事なもののだから、ずっと付いて歩きました。

——田中十三さんは、マキノからのカメラマンですよね。

そうそう、田中十三はね、マキノ省三とずっとやっとなったわけですわ。田中十三さんていうのはね、お米屋さんのご主人やったのが、好きでずっとマキノ省三さんと仲好うして…。あの時分、北野の辺に住んどったですなあ。十さんはね、だいたいカメラマンの助手しとって、それでマキノのカメラをまわして一人前になって、有名なカメラマンとして表彰されたこともあるんですよ。十やんとはね、よう遊びに行きましたわ。宮川町、ふたりで一杯飲んだりね。そら、しましたで。「ハーイ、十やん」て、むこうは「ヘーイ、ボンさん」って言うねん（笑）。若いからね、「ボンさん」て。それで一躍、宮川町では有名になっ

てしもうて。まあ、そっちのセンセイやね。

——そっちのセンセイなんですか（笑）。お金は？

そら、アンタ、やっぱコッチや。偉いさんやもん、払わんならんわ。

——マキノの営業部にいた都村<sup>(22)</sup>健さんも、エトナに入られましたね。

都村の健さんいうて、出入りしているうちにね。こいつがズボラや、ほんでズボケンいうて、有名な宣伝員だね。仕事をせんと、口だけモノを言うとる。だから有名なんや（笑）。昔からズボケンいうたら、「アイツは」って皆がいった（笑）。活動雑誌を、チョンチョン廻って、段々名前を売ってきよった。雅廷が京都帝国館の主任弁士だから、その関係で試写会はそこを使いよったわけやね。ズボケンはその時分に、提灯（記事）を書く、そこらへんの根回しですわな。それですわ。

#### 【聴き取り調査】

・第1回（2004年2月8日12：30-15：30 於：田中英一氏居室）

聞き手——田中英一氏ご家族、富田美香、紙屋牧子

・第2回（2004年3月13日14：00-14：40 於：田中英一氏居室）

聞き手——田中英一氏ご家族、富田美香、紙屋牧子

・第3回（2004年5月15日15：00-16：30 於：田中英一氏居室）

聞き手——田中英一氏ご家族、富田美香、上田学

#### 【謝辞】

本調査に際し、田中英一氏とエトナ映画社については田中英雄氏ご夫婦をはじめ田中氏ご親族の皆様から、島津製作所時代の戸越時吉氏については島津創業記念資料館の川勝美早子氏から、エトナ映画社撮影所の図像調査については古市眞也氏と山下キクエ氏より、貴重な資料と情報を賜りました。記して深謝申し上げます。

尚、本調査をすすめるにあたり、フィルムおよび写真・文献のデジタル化と分析については文部科学省21世紀COEプログラム「京都アート・エンタテインメント創成研究」の、エトナ映画撮影所の復元調査については同省オープン・リサーチ・センター整備事業「デジタル時代のメディアと映像に関する総合的研究」の、田中氏の聞き取り調査については同省科学研究費補助金（若手研究（B））「昭和期京都の映画文化におけるフィルム・コミッション的機能の形成と展開」のサポートを受けた。

## 注

- (1) エトナ映画社についての記述は、田中純一郎の『日本映画発達史』では「その他の小プロダクション」の項目に、社名・主宰者・創立年月・代表作を記した一行のみである（65頁、中公文庫、1984年再版、中央公論社）。
- (2) 中川紫郎（1892-1958）。監督。帝国キネマの監督として活躍後、フリーに。奈良に作った貸しスタジオの中川映画製作所を拠点に活動し、マキノ映画に時事映画部主任として関わった時期もある。1936年に合同映画社を設立し、文化映画を監督した。
- (3) 合同映画社は、1943年に日本映画科学研究所、京都映音製作部とともに電通映画に併合され、株式会社電通映画社となった。
- (4) 『キネマ旬報』1935年4月1日号、257頁。
- (5) 「小型映画利用で監督登用試験」『活動新聞』1935年3月23日付け。
- (6) 『白い鼠』は16mmの4巻ものとして企画された。
- (7) 森江章浩（生没年不明）。監督、編集。ヘンリー小谷が構成・撮影を担当した『軍犬物語』（1939年、日伊文化協会＝国際協和会映画部）で編集を、新世紀映画社『旅ゆく養蜂隊』の構成を担当している。
- (8) 『昭和人名辞典 第3巻 近畿・中国・四国・九州篇』（1987-1989年、日本図書センター）53頁、田中伊助項目を参照。
- (9) 所得税は『明治大正昭和京都市人名録』（1989年、日本図書センター）の、明治篇（底本「第十五版 日本紳士録」1910年、交詢社）56頁、大正篇（底本「第二十九版 日本紳士録」1925年、交詢社）57頁、昭和篇（底本「第四十版 日本紳士録」1936年、交詢社）48頁を参照。
- (10) 「伸びるエクラン 突如躍進するエトナ映画社 青年社長田中伊助氏と期待される良心的映画」『大阪毎日新聞』1935年3月31日付。
- (11) 三代目吉田奈良丸（1898 - 1978）。浪曲家。田中氏が師事した三代目奈良丸（本名炭田嘉一郎）は、桃中軒雲右衛門とともに浪曲の全盛期を開いた二代目奈良丸（1880 - 1967）の門下で、1929年に三代目を襲名。昭和の関西浪曲界の重鎮として活躍し、二代目と並んで「義士銘々伝」を得意演目とする。
- (12) 田中伊助の名前は、農地解放完了後の『昭和26年版京都年鑑』（1950年、都新聞）の人名録から突然姿を消している。
- (13) 吉田奈良丸の浪曲映画化企画については、田中氏所蔵のエトナ映画社「特報」資料（年月日不明）にあり。
- (14) 「エトナ映画の田中氏／各方面から引張風」『キネマ新聞』1934年10月26日号。
- (15) 『キネマ旬報』の撮影所通信、時報、田中氏所蔵の記事スクラップブックをもとに作成。
- (16) 片岡千恵蔵プロダクション（1928-1937）。全国の自由配給常設館が結成して設立した大日本活動常設館主連盟映画配給社の基本理念（制作・配給・興行の三部制）に共鳴した千恵蔵が、1928年5月にマキノ御室を退社して設立した独立プロダクション。作品の質・人気・経営面で安定していたこともあり、独自のトーキーシステムの開発や、日活ストライキの仲裁、結成時の第一映画社に撮影所を貸すなど、太秦の映画会社群のなかでも特異な存在だった。
- (17) 田中氏所蔵記事スクラップブックより「中川式トーキーシステム生る／エトナ撮影所と提携」（掲載紙、年月日不明）。
- (18) 田中純一郎『日本教育映画発達史』125頁



(1979年、蝸牛社)。

(19) 小谷ヘンリー (1887-1972)。カメラマン、監督。本名：小谷倉市。トマス・H・インスのもとで俳優をし、後にセシル・B・デミルのもとでカメラマンとして活躍。1920年の松竹キネマ設立に際して撮影技師長として招聘され、『島の女』『虞美人草』などでアメリカ仕込みの撮影術や話法を日本に導入。21年に蒲田撮影所を去り、23年に関東大震災で京都へ。以後、松竹下加茂を経て、パラマウント・ニュースの極東代表となり、ニュース映画界で力を発揮した。

(20) 田中氏がヘンリー小谷と出会ったのは、このパラマウント・ニュースの時期と思われるが、田中氏自身のご記憶からは、エトナ映画社の前後いずれの時期かを特定することができなかつ

た。ただし、応召前まで田中氏がパラマウント・ニュースのカメラマンとして活躍していた記事(「パラマウント撮影技師／田中英一氏應召」掲載紙・掲載月日不明)が田中氏所蔵資料にある。

(21) Studebaker。アメリカの車メーカー。馬車製造メーカー1902年に自動車に転身し、洒落たデザインで人気を博す。

(22) 都村健 (1899-1982)。映画ジャーナリスト。本名：井上健三。1923年、関東大震災を機に京都に居を移し、同年マキノ入社。28年からは御室撮影所宣伝部長として雑誌『マキノ』などの編集・発行を手がける。マキノ解散後、東活、エトナ映画の宣伝部長を経て、37年、通信合同社に入社、『合同通信』の編集に携わる。

#### 「岸雅夫作品リスト」

公開年(制作年)	映 画 題 名	製 作	監 督 名	撮 影	脚 色	録 音
1935年 1 月	鬼伏せ頭巾	エトナ映画社	後藤岱山	田中十三、 岸 雅夫、 大塚健司	野村雅延	
1935年 1 月	霧隠忍術旅	エトナ映画社	後藤岱山	岸 雅夫	桐葉亭貴念、 野村雅延	サイレント
1935年 2 月	鉄の爪 完結篇	エトナ映画社	後藤岱山	岸 雅夫	野村雅延	N.Tシステム
1935年 8 月	義人長七郎 江戸の巻	エトナ映画社	稲葉蛟児	岸 雅夫	野村雅延	
(1936年 6 月)	野村望東尼	合同映画		岸 雅夫		
(1937年 8 月)	日章旗の下に	国際短篇映画社	平尾善夫	岸 雅夫 (小寺雅夫)		映音システム
(1937年10月)	鐵窓より戦線へ	全勝キネマ	藤本修一郎	岸 雅夫 (田中英一)		
(1937年12月)	軍國の女神	全勝キネマ	藤本修一郎	岸 雅夫 (田中英一)	南郷亘	
(1938年 4 月)	成田不動尊御靈験記 平将門討伐絵巻	合同映画	中川紫郎、 監修・田中十三	岸 雅夫	森江章浩	塚越成治
(1939年 7 月)	防共の誓ひ	合同映画／ 京城発声映画製作所	中川紫郎	岸 雅夫、 田中十三		塚越システム
(1939年10月)	航空日本	國策文化映画化会		岸 雅夫		
(1940年 1 月)	二宮尊徳立志の巻	合同映画		岸 雅夫		
(1940年 4 月)	日柳燕石	合同映画	中川紫郎	岸 雅夫、 田中十三		
(1940年 7 月)	乗馬	九貴映画	森江章浩	岸 雅夫		
(1940年 9 月)	保津激流譜 改訂大堰川	エトナ映画製作、 九貴映画提供	森江章浩	岸 雅夫		
(1940年10月)	教育塔	合同映画	中川紫郎	岸 雅夫		
(1940年12月)	菊花	合同映画		岸 雅夫、 田中十三		
(1941年 1 月)	菊池盡忠録	合同映画	中川紫郎	岸 雅夫		
(1941年 3 月)	平等院	合同映画	中川紫郎	岸 雅夫、 田中十三		
(1941年 4 月)	慶州佛国寺と石窟庵	合同映画	中川紫郎	岸 雅夫		
(1941年 7 月)	嵯峨史	合同映画		岸 雅夫		

公開年(制作年)	映 画 題 名	製 作	監 督 名	撮 影	脚 色	録 音
1942年 1 月	東大寺大佛殿	合同映画	中川紫郎	岸 雅夫、 田中十三		
1942年 1 月	塔	合同映画	中川紫郎	岸 雅夫、 田中十三		
(不明)	軍艦の話			岸 雅夫		
(不明)	陸軍兵器学校「兵器魂」			岸 雅夫		
(不明)	鹿児島便り			岸 雅夫		
(不明)	四国便り			岸 雅夫		

## 「エトナ映画社作品リスト」

公開年月日	映画題名	監 督 名	撮 影	原 作	脚 本	録 音	出 演
1934.08.01	神崎東下り	後藤岱山、 (総指揮)田中聖峰	田中十三	吉田奈良丸	野村雅延	日本低周波システム・オールトーカー 録音 戸越時吉	光岡竜三郎、 三桝 豊
1934.08.14	暁の非常線	後藤岱山	田中十三	〃	〃	サイレント	水原洋一、 椿三四郎
1934.11.01	鉄の爪 第一篇 花嫁略奪篇	後藤岱山	田中十三	野村雅延	野村雅延	日本低周波システム	椿三四郎、 水原洋一
1935.01.09	鬼伏せ頭巾	後藤岱山	田中十三、 岸 雅夫、 大塚健司	村上浪六	野村雅延	サイレント	綾小路絃三郎、 五十鈴桂子、 中山介二郎
1935.01.27	霧隠忍術旅	後藤岱山	岸 雅夫	多奈加黙山	桐葉亭貴念、 野村雅延	サイレント	綾小路絃三郎、 水原洋一
1935.02.15	鉄の爪 完結篇	後藤岱山	岸 雅夫	野村雅延	野村雅延	N.Tシステム	松浦築枝、 白川小夜子
1935.02.14	黄金菩薩剣	稲葉蛟児	大塚修右	春名太郎	春名太郎	サイレント	小川雪子、 綾小路絃三郎、 五十鈴桂子、 高木新平
1935(未公開)	処女を護れ	後藤岱山	田中十三、 大塚修右	〃	野村雅延		五十鈴桂子、 水原洋一
1935.08.28	義人長七郎 江戸の巻	稲葉蛟児	岸 雅夫	〃	野村雅延		小川雪子、 綾小路絃三郎、 五十鈴桂子、 高木新平